

第89回麻布獣医学会 一般演題2

日常遭遇するエキゾチックアニマルの治療法

勝亦 智徳

富士動物医療センター

【はじめに】

ここ数年エキゾチックアニマルの診療数が増え、日常的に遭遇するようになってきた。エキゾチックアニマルは犬猫と若干の解剖学的違いがあったり、飼育方法が特異なため、治療テクニックが必要と考えられている。しかしながら、各動物種における解剖学的な特徴と飼育環境を理解すれば犬猫と同じ手技で治療が可能なものも多く、特別な道具や薬剤をを使わずに治療できると考えた。そこで今回、代表的な主訴の症例を院内に通常ある薬剤や器具を使用し、日常的な方法で治療を試みた。また、経験則ではあるが薬剤の選択や薬用量も併せて考察した。

- 症例1 ミドリガメ（ミシシッピーアカミミガメ） 2歳 雌
- 症例2 ロシアリクガメ 13歳 雌
- 症例3 ジェンゲルコーンスネーク 年齢性別不明
- 症例4 シマヘビ 2歳 性別不明
- 症例5 フトアゴヒゲトカゲ 7ヶ月
- 症例6 アカスズメフクロウ 8ヶ月

【結果と考察】

今回の症例は、エキゾチックの診療で多く見られる動物と症状の組み合わせである。特に内部寄生虫に関しては、検便を行えば必ず寄生していると考えてもいいほどの確率で発見できた。普段犬猫に使用している駆虫剤を用いて駆虫できた。経験則ではあるが虫類において寄生虫により下痢などを示している個体は全身状態が悪いことも多いため、脱水などの症状の治療を先に行い、駆虫処置をした方が存命率が高いと感じた。皮膚疾患のほとんどは外傷性のもので、なかには餌として与えたコオロギやゴキブリ、ネズミなどにより引き起こされるものもあった。

抗生物質の選択に際して、ニューキノロン系の抗生物質は、虫類には合わない個体が多く、リクガメで食欲不振や元気喪失となるものもあった。今回の症例においても、虫類にはペニシリン系の抗生物質が奏功していた。鳥類にはニューキノロン系の抗生物質を使用した。薬の用量では、ヌマガメの方がリクガメよりも高用量の方が効果を実感できた。リクガメは低用量でも効果が見られた。また、体重にあわせて投薬しても問題はなかったが、リクガメの体重が大きい個体については薬用量を下げてでも効果は実感できた。